慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	佐藤道生教授履歴・研究業績
Sub Title	Biographical resume & list of publication of Professor Michio Sato
Author	
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2019
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.117, (2019. 12) ,p.[i]- xiv
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	佐藤道生教授退任記念論文集
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01170001--004

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

佐藤道生（さとうみちお）教授　履歴・研究業績

履歴

一九五五年（昭和三十年）三月二十三日、佐藤松道（まつみち）・鈴子（すずこ）の長男として東京都世田谷区に生まれる。父は石川島コーリング株式会社（建設機械の製造・販売）に勤務するサラリーマン、母は東京都の保健所予防課に勤務する医師だった。家族はほかに河内山（こうちやま）コウ（母方の祖母）、河内山勝晴（かつはる）（叔父）。

一九六七年三月、和光学園小学校卒業。

一九六七年四月、成蹊中学校入学。この年、目黒区に転居すると同時に寄席通いを始める。中学三年時には噺家になることを決意する。高校を中退して柳家小さん（五代目）に入門することを企てるが、高校入学後、挫折してこれを断念する。

一九七三年三月、成蹊高等学校卒業。

一九八〇年三月、慶應義塾大学文学部文学科国文学専攻卒業。卒業論文「八代集時代の連歌」。

一九八〇年四月、慶應義塾大学大学院文学研究科国文学専攻修士課程入学。平安後期の和歌文学を勉強するつもりで大学院に進学したが、非常勤講師として出講されていた大曾根章介中央大学文学部教授に出会い、師事して古代日本漢文学の研究を志す。

一九八二年三月、慶應義塾大学大学院文学研究科国文学専攻修士課程修了。修士論文「『本朝無題詩』の研究」。

一九八二年四月～一九八四年三月　慶應義塾大学大学院文学研究科研究生。当時の国文には「折口学の徒にあらずんば人にあらず」という雰囲気があり、これには苦戦を強いられた。

一九八四年四月、慶應義塾大学大学院文学研究科国文学専攻博士課程入学。

一九八七年三月、慶應義塾大学大学院文学研究科国文学専攻博士課程単位取得退学。

一九九三年八月、大曾根先生の急逝に遭遇する。先生は永らく平安時代の学問大系を解明することに取り組まれていた。私

はこれを継承して研究に従事し、現在に至る。

一九九四年四月～一九九五年三月、中国・北京大学に交流学者として遊学する。

一九九五年四月、大曾根先生の後任として慶應義塾大学院の日本漢文学の講座を引き継ぐ。

二〇〇一年五月～二〇〇二年三月、イギリス・大英図書館で敦煌出土写本の調査に当たる。

二〇〇二年三月五日、論文「平安後期日本漢文学の研究」により博士（文学）の学位を取得する（慶應義塾大学　第三五五七号）。

職歴は次のとおり。

（専任）

一九八九年四月、慶應義塾大学文学部助手。

一九九二年四月、慶應義塾大学文学部助教授。

二〇〇三年四月、慶應義塾大学文学部教授。

二〇一四年十月～二〇一八年九月、慶應義塾大学附属研究所斯道文庫長を兼ねる。

二〇二〇年三月、慶應義塾大学を定年退職の予定。

（非常勤）

一九八七年四月～一九八九年三月、宇都宮大学教養部講師。

一九八七年四月～一九八八年三月、慶應義塾志木高等学校国語科講師。

一九八八年四月～一九九四年三月、フェリス女学院大学文学部講師。

一九八八年十月～一九八九年三月、鶴見大学文学部講師。

一九九三年度後期、中京大学文学部講師（集中講義）。

一九九五年四月～二〇〇一年三月、学習院大学文学部講師。

一九九六年四月～二〇〇一年三月、フェリス女学院大学文学部講師。
一九九六年四月～一九九八年三月、実践女子大学文学部講師。
一九九七年四月～一九九九年三月、お茶の水女子大学教育学部講師。
二〇〇二年七月～八月、アメリカ合衆国・イェール大学主催漢文ワークショップ講師。
二〇〇三年四月～二〇〇五年三月、成城大学文芸学部講師。
二〇〇四年度前期、名古屋大学大学院講師（二〇〇四年七月に集中講義）。
二〇〇四年度前期、福岡女子大学文学部講師（二〇〇四年九月に集中講義）。
二〇〇五年四月～九月、立教大学文学部講師。
二〇〇九年三月～四月、中国・北京日本学研究センター講師。
二〇〇九年四月～二〇一〇年三月、東京大学文学部講師。
二〇〇九年四月～二〇一六年三月、日本女子大学大学院文学研究科講師。
二〇一〇年四月～二〇一二年三月、青山学院大学文学部講師。
二〇一四年四月～二〇一六年三月、フェリス女学院大学文学部講師。
二〇一六年七月、アメリカ合衆国・イェール大学主催漢学ワークショップ講師。
二〇一八年九月、中国・北京師範大学講師。

研究業績

二〇一九年十月一日現在

著書・論文・口頭発表に分けて示した。書籍解題・事典項目・コラム・書評は省略した。
著書に収録した論文には、アルファベット（著書に冠したA～E）を付してその旨を示した。

一、著書

A『新撰朗詠集　校本と総索引』（三弥井書店、一九九四年一月、526頁、川村晃生氏と共著）
B『平安後期日本漢文学の研究』（笠間書院、二〇〇三年五月、400頁）
C『和漢朗詠集・新撰朗詠集』（和歌文学大系47、明治書院、二〇一一年七月、656頁、柳澤良一氏と共著）
D『三河鳳来寺旧蔵暦応二年書写 和漢朗詠集 影印と研究』（勉誠出版、二〇一四年二月、影印篇253頁、研究篇237頁）
E『句題詩論考――王朝漢詩とは何ぞや』（勉誠出版、二〇一六年十一月、406頁）

二、論文

「藤原周光の生涯」（『平安文学研究』第六十七輯、平安文学研究会、一九八二年六月、168－180頁）
「釈蓮禅と藤原親光の紀行唱和詩の成立時期について」（『三田国文』第一号、三田国文の会、一九八三年一月、13－20頁）
「『詩序集』成立考」（『国語と国文学』第六十二巻第十二号、東京大学国語国文学会、一九八五年十二月、25－37頁）B
「南家本『和漢朗詠集』奥書の再検討」（『日本古典文学会会報』第百十号、日本古典文学会、一九八六年七月、6－7頁）

「『法性寺殿御集』考」（『中古文学と漢文学Ⅱ』（和漢比較文学叢書　第四巻）、汲古書院、一九八七年二月、353－380頁）B
「陽明文庫蔵「猪隈関白記紙背詩懐紙」（翻印・解題）」（『中世文学と漢文学Ⅰ』（和漢比較文学叢書　第五巻）、汲古書院、一九八七年七月、1－76頁。大曾根章介氏・後藤昭雄氏・山崎誠氏と共著）
「宮内庁書陵部蔵『詩序集』（翻印・解題）」（『和漢比較文学研究の諸問題』（和漢比較文学叢書　第八巻）、汲古書院、一九八八年三月、1－54頁。大曾根章介氏と共著）
「蒙求古註集成索引」（『蒙求古註集成』下巻、汲古書院、一九八九年九月、607－660頁）
「『本朝無題詩』伝本考」（『和漢比較文学』第五号、和漢比較文学会、一九八九年十一月、13－23頁）B
「『本朝続文粋』と『本朝無題詩』」（『三田国文』第十二号、三田国文の会、一九八九年十二月、10－14頁）
「藤原式家と二つの集―本朝続文粋と本朝無題詩」（『国文学 解釈と鑑賞』第五十五巻第十号、至文堂、一九九〇年十月、123－130頁）
「大江佐国、花を愛し蝶となること―佐国伝の考察」（『国語と国文学』第六十八巻第十一号、東京大学国語国文学会、一九九一年十一月、51－60頁）B
「大江匡房―和漢に通暁した高位の学者」（『国文学 解釈と鑑賞』第五十七巻第三号、至文堂、一九九二年三月、30－37頁）
「『擲金抄』の撰者」（『新古今集と漢文学』（和漢比較文学叢書　第十三巻）、汲古書院、一九九二年十一月、137－147頁）
「『本朝続文粋』と白詩―白詩受容史上の大江匡房」（『白居易研究講座』第三巻、勉誠社、一九九三年十月、152－169頁）B
「『新撰朗詠集』解題」（『新撰朗詠集　校本と総索引』、三弥井書店、一九九四年一月、161－180頁）A、「『新撰朗詠集』の成立」と改題してBに収める。
「「暮年記」の執筆時期」（『藝文研究』第六十五号、慶應義塾大学藝文学会、一九九四年三月、73－83頁）B
「慶應義塾図書館蔵『性霊集略注』（翻印・解題）」（『和漢比較文学の周辺』（和漢比較文学叢書　第十八巻）、汲古書院、一九九四年八月、223－304頁）

「『和漢朗詠集』の世界」（『時代別日本文学史事典　中古編』、有精堂、一九九五年一月、210－216頁）
「大江匡房の『文選』受容」（『国文学 解釈と鑑賞』第六十巻第十号、至文堂、一九九五年十月、76－83頁）B
「北京古書事情」（『和本』第二十二号、東京古典会、一九九六年五月、1－5頁。『日本の名随筆別巻72古書Ⅱ』、作品社、一九九七年二月に収める）
「詩体と思想―平安後期の展開」（『日本文学史』第三巻、岩波書店、一九九六年九月、223－252頁）「平安後期の漢文学」と改題してBに収める。
「大江匡房の嘉承二年「朔旦冬至賀表」」（『日本漢学研究』第一号、一九九七年十一月、1－10頁）B
「寂照の遺跡」（『日本漢学研究』第一号、一九九七年十一月、51－53頁）
「匡房と寂照」（『むらさき』第34輯、紫式部学会、一九九七年十二月、63－67頁）B
「『擲金抄』解題」（『真福寺善本叢刊』第十一巻、臨川書店、一九九八年十月、617－635頁）B
「詩序と句題詩」（『日本漢学研究』第二号、一九九八年十月、15－33頁）B
「大江匡房「殿下御八講願文」は承保二年の作か―『匡房全集』の完成に向けて」（『藝文研究』第七十七号、慶應義塾大学藝文学会、一九九九年十二月、61－71頁）B
「『本朝続文粋』解題」（『日本漢学研究』第三号、二〇〇一年三月、1－18頁）「『本朝続文粋』成立考」と改題してBに収める。
「『白氏文集』解題」（『国立歴史民俗博物館蔵貴重典籍叢書　文学篇』第二十一巻、臨川書店、二〇〇一年七月、473－498頁）
「『扶桑古文集』訳注（抜萃）」（『野鶴群芳』、笠間書院、二〇〇二年十月、149－164頁）
「院政期二題」（『言語とテキスト学』（院政期文化論集　第二巻）、森話社、二〇〇二年十二月、119－122頁）
「句題詩詠法の確立―日本漢学史上の菅原文時」（『平安後期日本漢文学の研究』、笠間書院、二〇〇三年五月、205－228頁）B
「田安徳川家蔵『内宴記』（前半）の翻字と訓読」（『日本漢学研究』第四号、二〇〇四年三月、13－19頁。堀川貴司氏と共著）

「保元三年『内宴記』の発見」（『中世文学』第四十九号、中世文学会、二〇〇四年六月、46－55頁）E
「平安時代の策問と対策文」（『Minds of the Past』、慶應義塾出版会、二〇〇五年三月、238－260頁）E
「江註と私註―『和漢朗詠集』註釈の視点―」（『国語と国文学』第八十二巻第五号、東京大学国語国文学会、二〇〇五年五月、192－203頁）D
「日本漢籍の国外流出―明治前期の概観」（『藝文研究』第八十八号、慶應義塾大学藝文学会、二〇〇五年六月、24－35頁）
「朗詠江註の視点」（『日本文学』第五十四巻第七号、日本文学協会、二〇〇五年七月、12－21頁）D
「平安後期の題詠と句題詩―その構成方法に関する比較考察」（『和歌文学研究』第九十一号、和歌文学会、二〇〇五年十二月、25－38頁）E
「『和漢朗詠集』、幼学書への道」（『和漢比較文学』第三十六号、和漢比較文学会、二〇〇六年二月、35－48頁）D
「「朗詠江註」の発端」（『藝文研究』第九十一号第一分冊、慶應義塾大学藝文学会、二〇〇六年十二月、45－63頁）D
「「朗詠江註」と古本系『江談抄』」（『説話文学研究』第四十二号、説話文学会、二〇〇七年七月、19－29頁）D
「句題詩概説」（『句題詩研究』、慶應義塾大学出版会、二〇〇七年六月、1－45頁）E
「宮廷文学と教育」（『王朝文学と東アジアの宮廷文学』、竹林舎、二〇〇八年五月、490－508頁）「平安貴族の読書」と改題してDに収める。
「大江匡房の官職・位階と文学」（『王朝文学と官職・位階』、竹林舎、二〇〇八年五月、275－293頁）「大江匡房略伝」と改題してDに収める。
「『古事談』と『江談抄』」（『『古事談』を読み解く』、笠間書院、二〇〇八年七月、20－37頁）D
「説話の中の句題詩」（『藝文研究』第九十五号、慶應義塾大学藝文学会、二〇〇八年十二月、89－97頁）E
「省試詩と句題詩」（『日語学習与研究』第百四十一号、中国日語教学研究会、二〇〇九年四月、51－57頁）E
「「佐保切」追跡―大燈国師を伝称筆者とする書蹟に関する考察―」（『臨済宗妙心寺派教学研究紀要』第七号、臨済宗妙心

寺派教化センター、二〇〇九年五月、1－18頁）

「故事の発掘、故事の開拓」（『文学』隔月刊第十巻第三号、岩波書店、二〇〇九年五月、53－69頁）E

「平安時代の詩序に関する覚書」（『平安文学史論考』、武蔵野書院、二〇〇九年十二月、657－679頁）E

「慶應義塾図書館蔵 日本漢学関係図書解題」（『慶應義塾図書館の蔵書』、慶應義塾大学出版会、二〇〇九年十月、57－69頁。堀川貴司氏と共著）

「藤原道長の漢籍蒐集」（『名だたる蔵書家、隠れた蔵書家』、慶應義塾大学出版会、二〇一〇年八月、15－28頁）

「解説『和漢朗詠集』」（『和漢朗詠集・新撰朗詠集』、明治書院、二〇一一年七月、522－542頁）C

「平安時代に於ける『文選集注』の受容」（『注釈書の古今東西』（平成二十二年度極東証券寄附講座「文献学の世界」報告書）、慶應義塾大学文学部、二〇一一年十一月、99－120頁）

「柳市・三乗―本邦漢語考」（『藝文研究』第百一号第一分冊、慶應義塾大学藝文学会、二〇一一年十二月、118－127頁）E

「絵巻の錯簡―『年中行事絵巻』内宴の巻の場合」（『貴重書の挿絵とパラテクスト』、慶應義塾大学出版会、二〇一二年九月、82－100頁）

「九条兼実の読書生活―『素書』と『和漢朗詠集』」（『玉葉を読む』、勉誠出版、二〇一三年三月、187－205頁）

「「文章」と「才学」―平安後期の用例からその特質を探る」（『日本における「文」と「文学」』（アジア遊学百六十二）、勉誠出版、二〇一三年三月、133－142頁）E

「絵巻の錯簡―『年中行事絵巻』巻五の場合」（『中世の物語と絵画』、竹林舎、二〇一三年五月、121－143頁）「内宴を見る」と改題してEに収める。

「漢詩文・漢文学」（『日本文学史 古代・中世編』、ミネルヴァ書房、二〇一三年五月、140－160頁）「句題詩の展開―王朝詩史の試み」と改題してEに収める。

「『朝野群載』巻十三の問題点」（『藝文研究』第百四号、慶應義塾大学藝文学会、二〇一三年六月、1－17頁）

「慶滋保胤伝の再検討」（『説話文学研究』第四十八号、説話文学会、二〇一三年七月、75－84頁）E
「三河鳳来寺旧蔵暦応二年書写『和漢朗詠集』解題」（『三河鳳来寺旧蔵暦応二年書写 和漢朗詠集 影印と研究』研究篇、勉誠出版、二〇一四年二月、3－14頁）D
「The Popularity of Sino-Japanese Topic Poetry during the Heian Period」（『ACTA ASIATICA』、第百七号、東方学会。二〇一四年八月、59－79頁）同内容の日本語論文「平安時代に於ける句題詩の流行」をEに収める。
「養和元年の意見封事」（『池田利夫追悼論集』、笠間書院、二〇一四年十月、251－281頁）
「『江談抄』―平安時代の知識体系を垣間見る」（『世界を読み解く一冊の本』、慶応義塾大学出版会、二〇一四年十月、21－44頁）「文人貴族の知識体系」と改題してEに収める。
「四韻と絶句―『源氏物語』乙女巻補注」（『むらさき』第五十一輯、二〇一四年十二月、67－73頁）E
「秀句の方法」（『日本「文」学史』第一冊、勉誠出版、二〇一五年九月、465－474頁）E
「『百二十詠』と句題詩」（『藝文研究』第百九号第一分冊、慶應義塾大学藝文学会、二〇一五年十二月、272－283頁）E
「猿投神社の漢籍古写本―『史記』『春秋経伝集解』の書写者を探る」（豊田市史研究特別号『猿投神社の典籍』、愛知県豊田市、二〇一六年三月、18－22頁）
「伝授と筆耕―呉三郎入道の事績」（『中世文学』第六十一号、中世文学会、二〇一六年六月、77－86頁）
「室町後期に於ける『論語』伝授の様相―天文版『論語』の果たした役割」（『斯文』第百二十九号、斯文会、二〇一六年九月、17－28頁）
「藤原有国伝の再検討」（『慶應義塾中国文学会報』第一号、慶應義塾中国文学会、二〇一七年三月、120－135頁）
「平安後期の文章得業生に関する覚書」（『藝文研究』第百十三号第一分冊、慶應義塾大学藝文学会、二〇一七年十二月、127－143頁）
「金澤文庫本『春秋経伝集解』、奥書の再検討」（『図書寮漢籍叢考』、汲古書院、二〇一八年二月、27－34頁）

「『古文孝経』永仁五年写本の問題点」（『図書寮漢籍叢考』、汲古書院、二〇一八年二月、45－53頁）
「清原家の学問体系と蔵書」（『書物学』第十三巻、勉誠出版、二〇一八年八月、2－15頁）
「『玉葉』に見られる課試制度関連記事の再検討」（『変革期の社会と九条兼実『玉葉』をひらく』、勉誠出版、二〇一八年十月、261－272頁）
「吉田家旧蔵の兵書」（『書物学』第十四巻、勉誠出版、二〇一八年十二月、15－19頁）
「日本漢学研究に於ける古筆切の利用」（『慶應義塾中国文学会報』第三号、慶應義塾中国文学会、二〇一九年三月、26－47頁）

三、口頭発表

「『詩序集』成立考」、和漢比較文学会東部例会、東京都・中央大学駿河台会館、一九八五年一月二十六日。
「『法性寺殿御集』考」、和漢比較文学会東部例会、東京都・中央大学駿河台会館、一九八五年四月二十日。
「『新撰朗詠集』の成立」、和漢比較文学会第四回大会、東京都・早稲田大学、一九八五年十月十八日。
「『本朝無題詩』伝本考」、和漢比較文学会第七回大会、愛知県・名古屋女子大学、一九八八年十一月三日。
「大江佐国、花を愛し蝶となること」、和漢比較文学会東部例会、東京都・国文学研究資料館、一九九一年四月二十日。
「西府の大江匡房」、和漢比較文学会第十一回大会、北海道・北海学園大学、一九九二年九月二十六日。
「大江匡房の嘉承二年「賀朔旦冬至表」―異例の事態に重なった草稿の混入―」、和漢比較文学会第十四回大会、兵庫県・神戸大学、一九九五年十一月二十六日。
「詩序の破題―日本漢学史上の菅原文時―」、和漢比較文学会第二十一回大会、福岡県・太宰府天満宮、二〇〇二年九月二十九日。
「保元三年『内宴記』の発見」、中世文学会第九十四回大会、千葉県・聖徳大学、二〇〇三年五月二十五日。

「策問の史的展開」、和漢比較文学会第二十二回大会、東京都・法政大学、二〇〇三年九月二十一日。
「平安時代の策問と対策文」、Harvard University Kanshibun Conference、アメリカ合衆国マサチューセッツ州・ハーバード大学、二〇〇四年五月七日。
「江註と私註—『和漢朗詠集』註釈の視点—」、和漢比較文学会西部例会、兵庫県・大手前大学、二〇〇四年九月十八日。
「平安後期の題詠と句題詩—その構成方法に関する比較考察」、和歌文学会例会、東京都・学習院大学、二〇〇五年五月二十一日。
「『和漢朗詠集』、幼学書への道」、和漢比較文学会第二十四回大会、京都府・京都女子大学、二〇〇五年十月二日。
「「朗詠江註」と古本系『江談抄』」、説話文学会平成十八年度大会、京都府・佛教大学、二〇〇六年六月十八日。
「省試詩と句題詩」、和漢比較文学会第二十七回大会、宮城県・東北大学、二〇〇八年九月二十八日。
「平安時代に於ける『文選集注』の受容」、日本中国学会第六十二回大会、広島県・広島大学、二〇一〇年十月九日。
「絵巻の錯簡—『年中行事絵巻』巻五の場合」、奈良絵本・絵巻国際会議 岡山大会、二〇一一年八月二十一日。
「『朝野群載』巻十三所収の秀才申文三篇は実作か」、和漢比較文学会第三十一回大会、京都府・同志社女子大学、二〇一二年九月三十日。
「慶滋保胤伝の再検討」、説話文学会九月例会、東京都・青山学院大学青山キャンパス、二〇一二年十月七日。
「金澤文庫本『春秋経伝集解』、奥書の再検討」、書陵部漢籍研究成果報告会、東京都・東京大学東洋文化研究所、二〇一三年十二月七日。
「伝授と筆耕—呉三郎入道の事績」、中世文学会平成二十七年度春季大会、東京都・明星大学日野校、二〇一五年五月二十四日。
「『古文孝経』永仁五年写本の問題点」、書陵部漢籍研究成果報告会、東京都・慶應義塾大学三田キャンパス、二〇一六年六月四日。

「藤原有国伝の再検討」、和漢比較文学会第三十五回大会、東京都・成城大学、二〇一六年九月二十五日。
「平安時代の詩宴に果たした謝霊運の役割」、シンポジウム「謝霊運を中心とした六朝詩と日本文学」、中国・北京師範大学、二〇一七年九月九日。
「大江匡房と藤原基俊」、説話文学会二〇一九年度大会、愛知県・名古屋大学、二〇一九年六月三十日。
「日本漢学史上の句題詩」、慶應義塾中国文学会 第四回大会、神奈川県・慶應義塾大学日吉キャンパス、二〇一九年七月十三日。